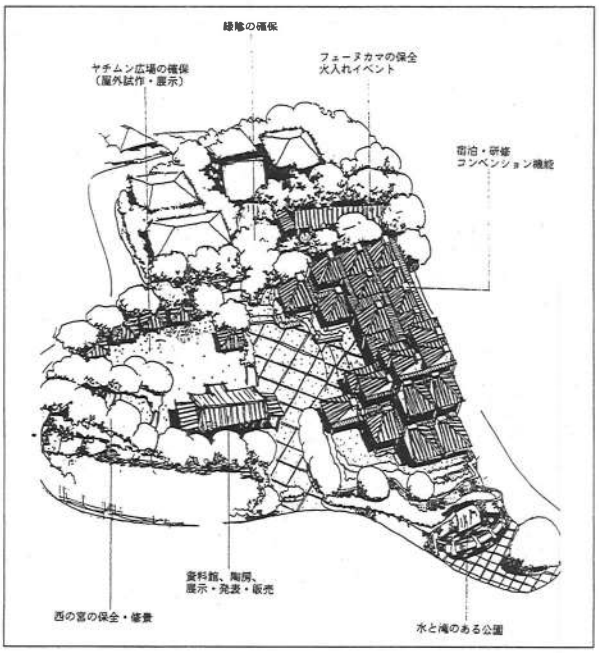
壺屋焼物博物館建設物語

城間　悟

1998年1月31日、開館セレモニー前夜、人気のないニシヌメー参道の階段に腰掛けていると、自分の役目は終わったような気がして何だか淋しくなってきた。やちむん通りを見下ろしながら、これまであった様々な出来事と壺屋焼物博物館建設で出会った沢山の顔を思い出していた。

壺屋が壺屋であるために

博物館建設の企画に触れたのは1989年だったと思う。当時那覇市の都市計画課に勤務していた私は都市デザイン係（現都市デザイン室）の森根伸夫氏が担当する壺屋地区景観形成モデルプラン作成調査を隣のテーブルから眺めていた。精力的にモデルプラン作成を担当する森根氏と地域づくりについてよく語り合った。「那覇らしさ」とか「壺屋らしさ」って何だろうと。那覇市教育委員会では、県庁舎建設で発掘された湧田窯の保存場所として壺屋が検討されていた。そこでモデルプランとして提案されたのが陶器の里の中核施設と考えた「資料館」であった。壺屋に資料館あるいは博物館が必要なことは決して難しい理屈じゃない。地域が地域らしくあろうとすれば地域が歩んできた道のりを分かりやすく示すこと。これ以外にない。まして壺屋は伝統的な「やちむん」を今に伝えてきた貴重な場所である。その連綿と続いた伝統を示していくことこそが地域づくりであるし、「壺屋らしさ」である。



景観形成モデルイメージ（1989年）

1990年那覇市教育委員会文化課（現文化財課）に勤務を移した私はそこで博物館建設担当技師となる。すでに文化課開発調整係長の横山芳春氏が作成した企画書があり、首里を主とした文化財修復事業と壺屋の博物館事業が私の主な任務となった。

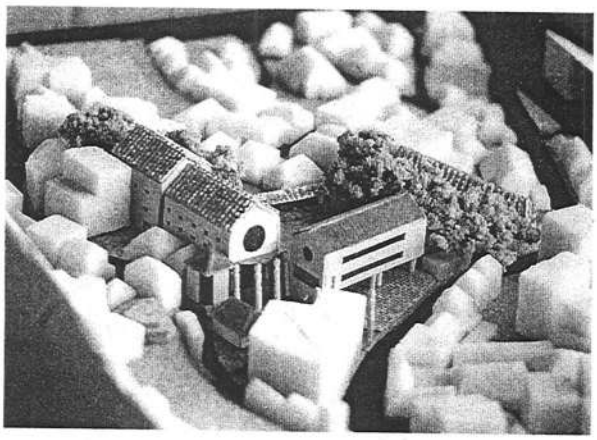
この事業は地域の協力なしにはやっていけない。まず、地域の代表に博物館建設の企画について意見を求めた。故島袋常隆壺屋町民会長、辺野喜良子婦人会長、城間康裕沖縄陶器株式会社社長であった。一通り企画を説明し終わると皆さんとても喜んでくれた。城間社長は提案者のひとりでもあったし、辺野喜氏は「壺屋にいい話じゃないの。」

しろま・さとる：那覇市都市計画課・地域計画係長（元壺屋焼物博物館・技査）

とおっしゃってくれた。町民会代表として最初は慎重であった島袋会長が「ありがとう、是非成功させましょう。」と言って握手を求めてくれたのが何よりも嬉しかった。そこで壺屋という味方を得た事業は庁内調整や予算の獲得に動き始めたのである。

何度も消えかかった壺屋焼物博物館構想の策定

その年、当時那覇市文化財調査審議会委員であった崎間麗進氏を委員長とする「壺屋焼物博物館構想検討委員会」を設置した。検討委員会では、1）焼物博物館建設の意義2）理念3）基本的役割4）魅力づくり5）検討事項と課題を議論してまとめ、構想（案）を当時の嘉手納是敏教育長へ報告した。併せて、各委員が焼物博物館建設に寄せる思いを綴った別冊で報告したところ、教育長はいたく感銘を受けた様子で「財政上、非常にきびしい状況ではあるが、どうにか実現したいなあ。」と言われたことをよく覚えている。



構想（案）説明模型

その構想（案）を受けて庁内の企画、財政および関連各所との調整を始めたが、用地確保の問題や財政、組織運営上の課題が山積していた。とくに「バブルがはじけた。」と表現される社会経済の状況で行政運営上も博物館どころではないといった感が強まり、何度も構想が振り出しに戻りそうになったものである。そんな中で企画、財政を担当する部署が特別に計らってくれた韓国出張調査が大きなターニングポイントになった。一介の建築技師であり焼物については門外漢の私にとって、沖縄ばかりか日本の陶芸の祖ともいえる土地と研究施設の状況、焼物という切り口から海外との関係を実感できる大変良い機会であった。同行いただいた陶芸家・松島朝義氏から歴史や技術、往時の社会状況をいたるところでレクチャーいただいたことが後々事業を進めるのに必要な基礎知識となった。また、松島氏が「これだけ凄い文化が壺屋のバックボーンにあることをみんな知らない。もったいない。」と言った言葉がさらに私の使命感をかきたてたのである。

1993（平成5）年度に関係部局、地権者、関係者調整の後、第2次総合計画7大プロジェクトの一つ「グランドバザール那覇の創出」主要構成事業として位置づけ「壺屋焼物博物館構想」を策定した。それから、壺屋町民会、壺屋陶器事業協同組合役員会等で懇談（構想の内容および町民会所有地の譲渡、売買条件など）を重ね、事業協力基本協定（沖陶・町民会・協同組合・市）締結にいたった（巻末資料参照）。

プロポーザル方式による設計者選定

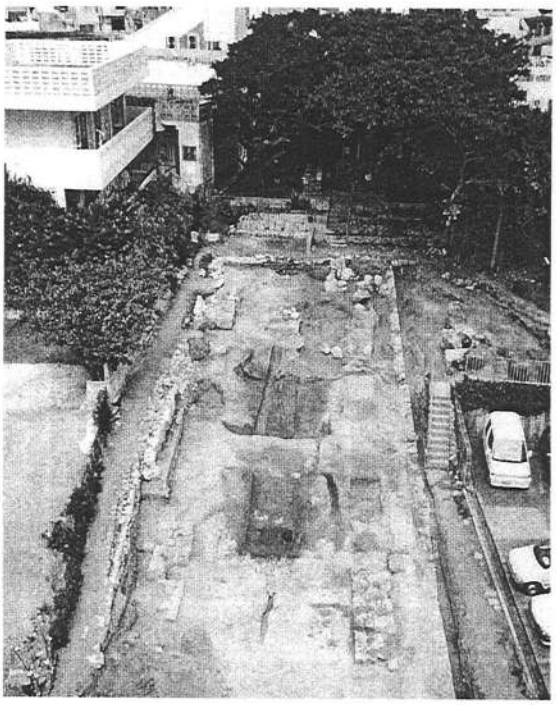
その翌年、構想に基づく展示基本設計、建築基本設計を実施している。展示設計と建築設計とはその専門分野が違う。展示設計は博物館の在り方から展示の内容、スタイルを組み立てていくし、建築は館の機能や展示の内容、周辺との関係にもとづいて建物そのものを組み立てる。壺屋という

地域のシンボルにも成り得る施設である。お互い蔑ろにできない、かといって妥協していては良い館はできない。それで展示、建築とも設計者選定についてはプロポーザル方式という参加業者の実績や設計コンセプト、さらに業務体制などを審査して選定する方法を採用した。最初、展示設計プロポーザル審査会（委員長／鈴木雅夫琉球大学教授）を設置して博物館構想を設計コンセプトにどう反映させていくか、参加者（乃村工藝社、トータルメディア、丹青社）提案を審査会で審査して乃村工藝社を選定した。壺屋全体をエコ・ミュージアムと捉え、博物館を戦略的な地域活性化の中核と位置づけたこと、さらに来館者ニーズへの対応にきめの細かさが感じられたことなど総合的な評価が高かった。展示設計を進め、館の在り方、展示内容の骨子を作成した後、展示要件にもとづく建築設計プロポーザルを実施（建築設計プロポーザル審査会委員長／安次富長昭琉球大学教授）した。そこでは、アジアのへそと捉えた沖縄の中で、博物館は過去と現在、そして未来を重層的につなぐものであり、建築はそれを具現化する、そして壺屋に波動を送るという建築研究室ＤＡＰが選定（1994年／平成６年）された。

信念に支えられた展示・建築設計

展示設計ではまず展示ストーリーの設定に苦労した。沖縄の歴史や壺屋の生い立ちを焼物というモノや歴史資料によるコトで展示ストーリーを組み立てたいのであるが、資料が少ないし、沖縄の焼物について歴史や生い立ちを実証する資料や研究成果が十分でないらしい。はたと困った。従来語られているヤチムンの歴史は核心の部分で「～と言われている。」といった伝承や少ない資料をもとにした推察が多い。そんな中で展示設計を進めた乃村工藝社の設計スタッフは専門委員と何度も何度も夜遅くまで額をつき合わせた。その中でも琉球大学教授の池田榮史氏（考古学）には裏の学芸員的に指導をいただいた。建築設計で重要なのは、要求される機能を限られた空間のボリュウムにまとめていく作業。壺屋という場所で博物館のボリュウムは、フェーヌカマという壺屋のシンボルを圧迫するものであってはならない。さらにニシヌメーを背後に隠してしまってはならない。博物館が建つことによってそれらの文化財を際だたせる必要があった。その解答が資料収蔵室の地下化であり、ニシヌメー参道の大階段である。

設計最大のヤマ場は、博物館予定地の緊急発掘によりニシヌカマが掘り出され、急遽設計変更をして原位置展示したこと。



掘り出されたニシヌ窯

展示設計のスタッフ、建築設計のスタッフ（特に真喜志好一氏）は「ここが俺の腕のみせどころ」

とばかりに、喜んで？変更設計に協力していただいた。ぎちぎちのスケジュールと予算の中で、「博物館建設で歴史の証人たるニシヌカマを殺してはならない。」という信念が多くの人や組織を動かしたのだと思う。遺構や遺跡を原位置で残して見せることが歴史を体感する最高の方法である。今、思い出しても良い仕事のひとつだったと思う。

「博物館はできるかね？」

開館２年前の1995年（平成７年）度に学芸員のいない焼物博物館準備係設置。しかし、ここで初めて博物館準備に専任する体制ができた。建築実施設計や工事の発注については別係の建築技師が担当し、ブツブツ言いながらも経験豊かな係長がサポートしてくれた。特に密集市街地での困難な工事は要所要所で現場への的確な指示と工程の管理などで大いに助けられたのである。また、用地の取得や物件補償など、係職員にとって困難な契約をサポートしてくれた他の部署の先輩達がとても頼もしく感じられたものである。博物館用地の確保については町民会の当時事務局を努めた小橋川昇氏が苦労した。町民会の法人化を達成した事でスムースな用地の取得が可能になった。故高江洲育男町民会長も足に障害をお持ちであったが、博物館用地の件では何度も市役所や教育委員会へご足労いただいた。私の顔を見る度に「城間君、博物館はできるかね？」と訊ねられる期待と不安の入り交じった高江洲会長の笑顔が忘れられない。

開館準備に右往左往、やっと就いたか学芸員

1996年（平成８年）度に現館長の渡名喜明氏が準備室長で就任してから事業がトントントンと進んだ。特に博物館組織の設置や博物館資料の収集、展示解説資料の作成、開館特別展の準備など、門外漢ではにっちもさっちもいかなかったことが急ピッチで動き始めたのである。それまで外部専門委員に特別のご指導をいただいたことで学芸員不在という大きな欠陥を繕うことができたとは思う。しかし、計画当初から学芸員という専門スタッフがいればこんなに右往左往することはなかったなあと痛感した。開館まで１年もない1997年４月以降、館長、学芸員、非常勤職員、臨時職員が一丸となって獅子奮迅の活躍を見せた。

1997年６月建築工事完了、同年12月展示工事完了。あとは設置条例と開館セレモニーの準備。セレモニーの準備には余所から２人の職員が応援に入ってくれた。しかし、ヒイヒイ言いながらもここまで事務方を一手に引き受けていた同胞の本永亨氏が虫垂炎を悪化させて入院。これは開館直前の準備作業上非常に痛かった。

壺屋焼物博物館の心

いろんなトラブルがあった。それでもどうにかこうにか２月１日の開館を迎えたものである。壺屋焼物博物館建設の過程でいろんな障害に直面したとき、いつも脳裏に浮かんだ一文がある。これが壺屋焼物博物館の心だろうと思う。

「省ると壺屋の仕事は、現存する日本の民窯の中で、最も優れたものの一つに数えることが出来る。土地の人々や指導の位置にある人々は、却ってこの実情を認知していない。今出来るものにはろくなものはないやうに考へ、それに雑器の類であるからとかく軽く眺めて了ふ。指導する者は、一日も早く旧態から脱却させて、本土風な新しい工業に発展せしめようとする。だが、それらの見方や

態度が、如何に愚かなものであるかを知らないのだ。それは又壺屋の現状が、他の多くの窯場と比べ、如何に尊敬すべき多くの要素を有つかを熟知しないからであった。更に又焼物の美やその性質に就いて何も深い洞察がないからに過ぎない。それをよく熟知していたら、多くの尊敬を以てその長所を育て、その固有性を守護する方策を講じるであらう。そうして如何に現在の日本が壺屋の如き窯場を有つことが、一つの誇りであるかを自覚するであらう。」

（柳宗悦全集第15巻「現在の壺屋とその仕事」より）

まだまだ語り尽くせないほど多くの博物館建設物語がある。これからも沢山の博物館物語が生み出されていくと思う。共に悩み、苦しみ、笑ってくれた同僚や博物館建設に尽力いただいた皆さんに心より感謝を申し上げるとともに、熱い情熱をもって博物館事業に取り組み、館の完成を見ることなく志半ばでお亡くなりになった島袋常隆元壺屋町民会長、高江洲育男前壺屋町民会長のご冥福をお祈りします。